



TITLE:

山本博士を憶ふ

AUTHOR(S):

金持, 一郎

CITATION:

金持, 一郎. 山本博士を憶ふ. 經濟論叢 1941, 52(6): 762-764

ISSUE DATE:

1941-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131542>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本博士を憶ふ

金持 一郎

山本博士の學的態度を貫く主要な一つの傾向は現實主義である。すなはち博士は自ら空想と情熱とを能ふかぎり抑へて、經驗と事實に生きることとを以て自らの態度とされたのであるが、しかしこのことは決して博士をして沒理想主義者たらしめたのではない。博士の主たる關心の對象であつた社會生活の改善に關する限り、その立論は理想を必要とするものであつて理想を離れてはこのことは論理的に成立しないのである。博士の現實主義的傾向はその百數十篇の論文（經濟論叢、山本博士還暦祝賀記念論文集參照）に表はれて居り、これらを通じて博士が努められたところは、單に自らの問題に解答を與へんとするにあつたのではなく、實に明

治の末期から昭和の初期に至るまで日本の社會が問題とした問題に對する博士の解答を提示せられたのである。この期に於て博士は、日本の悩みを自ら悩みつゝそれらの悩みの殆んど全面に對する解答を與へやうとされたかに見える。この悩みの中に生くる博士にあつては、社會問題の部分領域に對する解答は社會生活の全面的改善に資する所以ではなかつた。このために博士の關心は廣まり、博士の知識は社會問題の廣汎なる領域に互つてゐた。このことは博士の學的生活から説明さるゝよりも、むしろ直接に博士の人格そのものの、反映として把握さるべきであらう。

博士の全生涯を貫く中心志嚮は、空想的世界に向つての飛躍的前進ではなくして、現實社會の改善のための一步前進であり、經驗的世界の正しき認識の上に立つて妥當的改善策を考案することであつた。博士の立論は科學に立脚しながらも、博士は自ら科學に對する解答を與ふるよりも寧ろ時代に對する解答を與へやうとされた。この意味に於て博士はよき社會政策學者で

あつたといふことができる。

博士の學的生活に於ける現實主義的傾向といふことに對して一つの限定を加へておく必要がある。博士はよき意味の自由主義に立脚された人であり、またよき意味の個人主義を立場とせられた人である。これは恐らく、博士が年若くして米國に赴き、イーリー、クラーク等の門に入り、獨逸に至つてワークナー、シュモラー等の社會政策學派に就き、また英國にあつてフェビアン協會のシドニー・ウェブの教へを乞はれた等の經歷が然らしめたものであらう。後にはこの經歷に基づく感化が博士の人格の一部をなし、その端正なる生活態度の如きは、博士の母堂の影響と共にこの外遊による影響を無視しては考へられない。社會改良に對する烈々たる闘志の如きも、歐米に於けるこれら教授の學風と人格を離れて見ることを得ない。博士の主張の根柢を貫く個人主義及自由主義もまた恐らくは博士がこれらの學者によつて受け繼がれたものと見る事ができる。これらの傾向は博士に於てその生涯を通じ

て變ることなく、それは博士の信仰といふよりはむしろその人格の一部をなしてゐたのである。従つて博士の人格が變るところなきが如く、思想に於けるこれらの傾向も、博士にあつては、時代の變化の如何に拘らず變るところがなかつたのである。博士の論説が前後を通じて極めて鮮明であるのも、その一つの理由はたしかにこの立場の統一にあると見ることができ、(博士は文章の推敲に最も努めたる人であり一句といへども疑點を残さざる表現に苦慮せられたことも勿論これに與つてゐる)。

従つてまた博士の結論が假りに社會の要望との間にいくぶんの乖離を生ずるに至つたとすれば、その理由もまたこれにあると見なければならぬ。明治末期より大正に至る間、博士が輝かしき業績を残されたる事實は、一面、博士の努力に負ふとともに、他面、博士の自由主義的傾向が最もよく社會に受容せられたことをも示してゐる。この時期において博士の自由主義は右の意味の現實主義と合致することを得たのであり、博士の晩年に於て兩者の間に分離を現はすに至つたとすれ

ば、それは博士に於ける人格の分裂ではなくして、却つて博士の強靱なる人格に對する社會の反逆であつたとさへいふことができる。その生涯を通じて時代の要望の中に主張を提示せんとせられた博士は、晩年に於てはまた、たとひ社會の要望の外に立つとするものもその主張の根柢を動かさるゝことなき意志の人でもあつた。博士のこの態度の中に、科學と人格の二律背反に關する限りなく深き暗示を吾々は汲みとることができ

る。
現實主義の一つの傾向は體驗的知識を重んずるといふことであつて、このことが博士の結論をして折衷的、實際的、而してまた日本的たらしめた。この日本的な一面が或る人々をして博士を帝國主義者と言ふに至らしめた。博士の主張と帝國主義者の主張とが同一の歸結に到達することがあつたとしても、博士は帝國主義を斷乎として排撃する人であつた。帝國主義は個人主義の原理に淵源するものではなく、却つて帝國主義の結果は個人生活の充全なる發露を妨げるといふの

が博士の見解ではなかつたかと思はれる。

博士の廣汎なる學殖に對しては之を一瞥するだけでも容易ではない。博士の人格に關しても輕々にこれを短き言葉を以て表現することは許さるべきでない。それにも拘らず學徒の幸福と不幸とを左右する名聲と評價とがゆがめられ誤られて存立する場合には、たとひ短き言葉を以てするとしても正しき姿に改めるための努力が道德的義務の領域を超えて吾々に課せられる一つの責務ではなからうかと思ふ。この態度のために、博士に對する私の感想の卒直なる表白さへも博士は微笑を以て受容されるであらう。博士はそれほどに透徹せる個人主義の理解者であつたのである。

博士の私一個人に對する學恩と慈愛に關してはこれを一々こゝに記すべきではない。新しき光を浴びて吾々の前に展開する理論と歴史の廣き分野の中に限りなき知識の泉を求めて政策論を一層深め或は高めることが博士の靈前に捧げうべき最良の供花ではなからうかと思ふ。(二六・五・二三)